柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 158 号

草創期の
柿生中学校 - 17

そして「思い出の丘」（その 1）

小林 基男　（柿生郷土史料館専門委員）

◆柿生の教育と臼井義胤、白井錠次郎、青戸四郎右衛門◆

2017（平成 29）年 10 月 21 日、柿生中学校の創立70周年記念式典において、生徒代表が板倉敏郎元校長にインタビューする形式で、今やグランドの片隅にひっそりと身を寄せ合って佇んでいる「思い出の丘」の石碑群に、改めて光を充てる試みが行われました。この「思い出の丘」の整備は、創立 40 周年の記念事業の一部として、昭和 62（1987）年に行われました。当時の事情や「思い出の丘」誕生にいたるいきさつは、創立40周年記念誌『わが丘に希望輝き』に詳しく記されていますので、記念誌を頼りに、シリーズの最後に紹介させていただきます。

柿小百周年記念の「思い出の丘」碑

「思い出の丘」の碑は、柿生小学校の創立百周年を祝う記念事業の一部として造られました。碑には、「川崎市立柿生小学校発祥の地を記念する　思い出の丘　昭和四十八年十一月十日　創立百周年に卒業生之を建つ」と記されています。昭和 48 年は 1973 年に当たりますから、柿生小学校の創立は明治 6（1873）年になります。「思い出の丘」には、外に「臼井義胤氏頌徳碑」と「白井錠次郎先生頌徳碑」の二つの頌徳碑が建っています。「思い出の丘」は、以前の通学路である 123 段の階段をあがった木陰にあります。（階段は現在も残っていますが、今は使われておりません）通学生徒が朝夕毎日通る場所でした。戦前・戦中この地には天皇・皇后の御真影と教育勅語を治めた奉安庫と二宮尊徳の銅像が建っていました。このうち二宮尊徳像は、戦時中の資材不足を補うために国に供出することになり、台座から外されて姿を消しました。奉安庫もまた昭和 21(1946）年 1 月の天皇の人間宣言後に取り壊されました。空白の地となった奉安庫の跡に、「臼井義胤氏頌徳碑」が建てられたのは、それから間もなくでした。「思い出の丘」の最初の碑が登場したのです。

「臼井義胤氏頌徳碑」は、柿生教育史の大恩人、臼井義胤氏の功績を後世に語り継ぐために建てられました。柿生地域は、片平、下麻生、岡上、黒川、上麻生と５校もの尋常小学校を抱え、その人件費や経常費の負担が重く、高等小学校を建てる資金がどうしても工面できなかったのです。切羽詰まった柿生地域の代表者は、下麻生出身で東京に出て成功し、大富豪となった臼井義胤氏を東京の自宅に訪ね、高等小学校の建築費を援助してほしいと願い出たのです。事情を聞いた臼井氏は、その場で建築費と経常費を賄う基金を提供すると快諾してくださったのです。こうして明治 35（1902）年 4 月、現在の柿生中学校のグランドに、「高等義胤小学校」が誕生したのです。臼井氏の名を校名としたのは、氏に対する村人の感謝の念の現れでした。その後、教育制度の改変のたびに、校名も変更されたのですが、義胤氏の名は、昭和 16（1941）年まで39年間校名に残されていました。昭和16年、校名が「川崎市立柿生国民学校」と改められた際に、当時の後援会が中心となり、臼井義胤氏の名と功績を、忘れることなく後世に語り継ぎたいと、頌徳碑を造ることにしたのです。碑には当時の川崎市長が揮毫した讃が記され、昭和十六年十一月三日の日付が刻まれています。ところが碑の建立寸前に日米開戦の日を迎え、建立は戦後まで延期されたのです。（続く）

臼井義胤氏の肖像写真（左）と臼井義胤氏頌徳碑

【お詫びと訂正】　本稿第14回、「柿生小学校の移転その1」で、最大地主を対間虎吉様と記しましたが、最大地主は佐藤与四郎様で、対間様は売却を渋る地主様たちの説得に尽力して下さった方です。お詫びして訂正します。

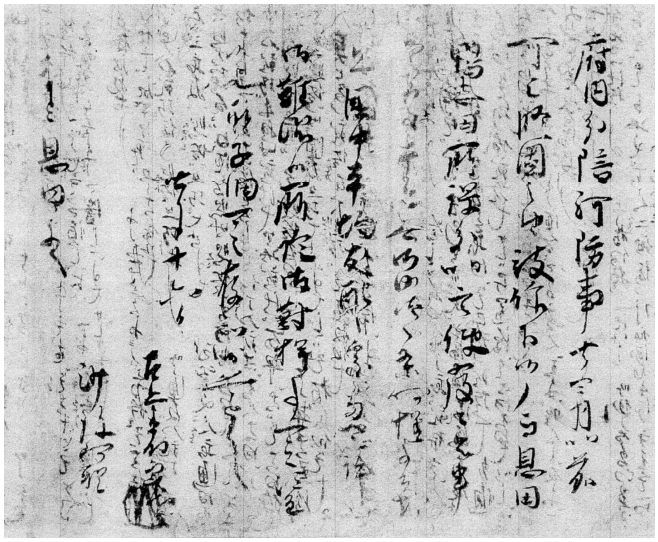
鶴見川流域の中世
その 17

中世史料・資料の隠れた宝庫　恩田郷（その３　恩田氏）

中西望介（戦国史研究会会員・都筑橘樹研究会会員）

恩田郷を苗字の地とする恩田氏は金沢文庫文書に登場する。金沢文庫文書は鎌倉幕府執権北条氏の一族である北条実時が、稱名寺境内に基礎を築いた金沢文庫に蒐集した文書や書状からなっている。恩田氏宛てに出された年未詳の武蔵国留守所代連署書状は金沢文庫から早い時期に流出して、現在は早稲田大学図書館に所蔵されているので見てみよう。

府中市分倍河原付近を流れる多摩川の堤が破損したため、武蔵国内平均に賦課をかけて四月以前に堤を修固するように命じたが、恩田氏が割り当てられた修築工事に応じないので武蔵国留守所代である左兵衛尉実長と沙弥阿聖が連署して督促したのである。



図版　武蔵国留守所代連署書状　早稲田大学図書館所蔵

これとほぼ同じ内容の文書が同じ日付で市尾（横浜市青葉区市ヶ尾）を苗字とする市尾入道宛てにも出されている。2 通の書状は同じ年に出されたと考えられ、その年代は弘安年間（1278～1288 年）と推定されている。堤の修固作業が武蔵国の全ての郷に賦課された大規模な工事であったことがうかがえる。

どうして恩田氏に宛てた書状が金沢文庫に納められていたのであろうか。この文書は一旦その役割を終えて反故になり、裏返にして「聖教釈文疏注」を記すために再利用されている。紙が貴重であった時代にはこの様に再利用して、「聖教釈文疏注」という仏教関係の書籍として金沢文庫に納められていたのである。すると、この文書は恩田氏が金沢北条家に持ち込んだ事になる。恩田氏と金沢北条氏とはどの様な関係にあったのであろうか。それを知る手掛かりは尾張徳川家の蓬左文庫に所蔵されている恩田兵衛太郎殿宛ての 3 点の文書である。これらの文書も金沢文庫から早い時期に流出して尾張徳川家の蓬左文庫の中に残されていた。この文書も年号が書かれていないが文永十一年（1274）頃と推定される（『神奈川県史資料編1』）。3 点の文書は「白鳥一羽を差し上げたいと思います。ご覧に頂けるようにお取り計らい下さい。今日河辺より帰参いたしましたので、ご披露ください」など、手紙の差出人が恩田兵衛太郎を通じて目上の者に取次を依頼する内容である。河辺は下河辺庄と見てよいであろう。鎌倉時代後期になると下河辺庄は金沢北条氏の所領であり金沢北条氏から稱名寺へ寄進され、稱名寺を領家、金沢北条氏が地頭として支配している。したがって、恩田兵衛太郎が取り次ぐ先は金沢北条氏と考えられる。恩田兵衛太郎は武蔵国留守所代連署書状に記された恩田殿と同一人物あるいは一族であろう。また、建治元年（1278）六条八幡宮造営注文にみえる恩田太郎跡も一族と考えられる。恩田氏は金沢北条氏の屋敷に詰めて来訪者からの伝言や手紙や進物を取り次ぐ役割を果たしていることから、金沢北条氏の家政を担う被官（家人）であろう。恩田氏が武蔵国留守所代連署書状を日頃から関係の深い幕府中枢にある金沢北条家に持ち込んで援助を頼んだのか、堤の修固を終えて用済みとなった書状の裏を再利用する目的で持ち込んだのかのいずれかであろう。

ちなみに金沢北条氏の被官としては『徒然草』の作者兼好法師と兄弟と想定された倉栖兼雄が有名であるが、その後の研究でこの二人は兄弟ではないことが明らかにされている。

恩田町に所在する徳恩寺は王禅寺・東光院・三会寺などと共に多くの末寺を持つ有力な真言宗寺院である。等海上人は「律家之碩徳」といわれ初め金沢稱名寺に住い、後に恩田延命院に居し建武二年（1335）に徳恩寺を開いている。等海の弟子鎮海は王禅寺花蔵院と号し、長海は岡上東光院を開いている（「三宝院伝法血脈」）。鎌倉幕府が滅亡すると稱名寺の学僧達は地方寺院に進出して布教活動を行っている。等海上人が恩田郷に徳恩寺を開く背景には、先に見たように鎌倉時代後期には恩田郷は恩田氏を仲介して金沢北条氏や稱名寺と密接な関係が結ばれていたからであろう。

恩田郷に所在した万年寺の梵鐘は正中二年（1325）に鋳造されている。その銘文には「武州恩田霊鷲山松柏万年禅寺」とあり万年寺が禅宗寺院であることがわかる。禅宗を積極的に保護し寺院を開いたのは北条氏を中心とする鎌倉幕府の上層武士達であった。万年寺を開基した広鑑は梵鐘銘に「大檀那菩薩戒弟子広鑑」と刻まれている。「菩薩戒」を刻む梵鐘は万年寺の他に鎌倉市材木座の崇寿寺（現廃寺）の梵鐘（1321 年鋳造）「大檀那菩薩戒弟子崇鑑（北条高時）」銘、鎌倉市山ノ内浄智寺の旧梵鐘（1332 年鋳造）「本寺大檀那菩薩戒弟子慧清」「大檀那前相模守菩薩戒弟子崇鑑（北条高時）」銘、鎌倉市山ノ内東慶寺旧在の梵鐘（1332 年鋳造）「大檀那菩薩戒尼円成」銘である。いずれも鎌倉市内の有力寺院であり 14 世紀前半に鋳造され、檀那には北条高時やその所縁の人々が「菩薩戒」を冠しているという共通点がある。万年寺の大檀那広鑑も北条氏所縁の可能性が考えられる。　（つづく）

シリーズ
教育の歩み 第３部

日本の学校と教育（14）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆四民平等と学校教育◆

富国強兵・殖産興業のスローガンを掲げて、日本の独立を守り抜こうと考えた明治政府は、先ずはその前提として、中央の命令を正確に地方に伝え、かつ実行させる組織作り、中央集権体制を確立する必要がありました。ここに版籍奉還と廃藩置県を断行し、合せて市町村制を施行することで、命令伝達経路を整えました。財政基盤を整えるための税制は、地租改正を断行して、農民に負担を強いる形を築きました。残された課題は、日本国家の危機において、いかに野にある英才を明治政府の下に結集させるかにありました。

人材登用の枠を、広く全国に広げるためには、不人気の初等教育学校を、社会に定着させることが欠かせません。それには、学校教育の効用を、国民一般に理解してもらう必要がありました。そこでは、個人の学習能力が優れていれば、高い社会的地位を得ることも可能だということを、強く訴え納得してもらうことが重要でした。しかし、実例が生まれるには、短く見ても10年以上の歳月がかかります。そこでまずは、人材登用と四民平等の原則を、国民の間に広めることが重視されたのです。八級から一級までの等級制と競争試験制度の導入が図られたのは、そのためでした。

日本の近代小学校の草分けとされる上京第27番組小学（柳池）校の記念碑
明治2年京の町衆の寄付で建設

身分の高い上士の子であろうと、下士の子であろうと、町人や農民の子であろうと差別されず、試験の成績が全てということが、徹底されたのです。当時の 4 年制の尋常小学校は、八級から一級までの8等級に分かれており、先ずは一番下の八級に入学し、試験の成績によって上の級に進級する仕組みになっていたのです。試験は半年ごとに行われ、成績に応じて上の級に進級する仕組みになっていました。

当然最初は一番下の八級の試験を受けなければならないのですが、成績次第で飛び級も可能でした。ですから、八級から六級に進級する子もいましたし、八級を何度か繰り返す子もいたのです。従ってここには、同一年齢の子ども達を束ねて教育するという発想はまだ生まれていませんし、毎年とか半年毎に必ず進級する学級制もなかったのです。こうした制度設計をすることで、身分や豊かさで人を差別しない世の中になったこと、学校の成績の良し悪しで身分の壁を乗り越えることが出来るようになったことなどを、閉鎖的な村社会に生きる人々にも実感させることが、狙いとされたのです。学校は身分の平準化作用を齎すことを、人々に強く意識させることが狙いとされたのです。

明治政府の構築した中央集権体制においては、県郡制の頂点の県令（今の県知事）や郡長は中央から派遣するが、その下に位置する市町村長は、地方の名望家を指名して、これに充てていました。中央省庁の役人や税務官僚、県令や郡長を補佐する地方機関の役人を確保する必要から、人材はいくらでも必要でした。そのために、教育機関の早急な整備が必要だったのです。有為な人材を数多く発掘して、中等や高等の教育を施さなくては、次代を担う優秀な官僚は育ちません。

1970 年代のことですが、日本とソ連（当時）の日本近代史とロシア史の研究者が揃って「日本とロシアは、共に農民を犠牲にして資本主義化を推進した共通項を持ちながら、ロシアでは社会主義革命が成就したのに、日本では革命が起きなかったのは何故か」のシンポジウムが持たれました。その時大方の支持を得たのが、「日本では高等教育を受けた人材は、政界、官界、実業界に学界などで活躍の場が広く用意されたが、ロシアでは人材登用の門は狭く、一部大貴族の子弟以外は人材登用の門は閉ざされ、余計者として一生を終えるしかなかった。そうした状況に反発した者たちは体制変革を志し、優秀な若者が次々に社会主義者となった」とする考え方でした。ロシア文学の主役、余計者に焦点を当てた卓見でした。日本における人材登用のシステムは、ソ連の研究者の間でも高く評価されていたのです。　続く

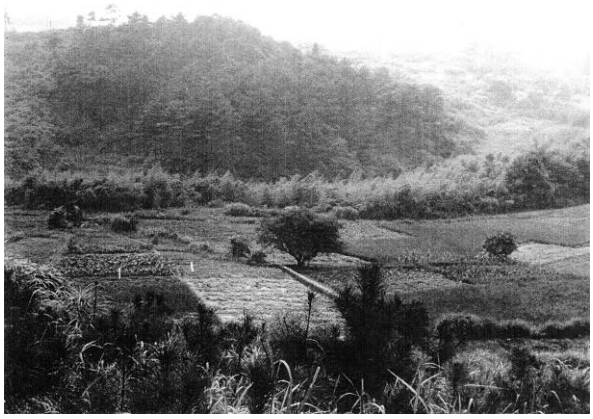
岩科（いわしな）学校　西伊豆松崎町に残る伊豆地方最古の小学校校舎、明治13（1880）年9月竣工。1975年より国の重要文化財。

誌上特別展

写真で見るふるさとの原風景（2）栗木・五力田・片平

黒川から見たとんび池　面積 70 坪（S45.8）
現在は野球場やテニスコートを備えたとんび池公園

区画整理前の栗木台から見たとんび池方面
現栗木台３丁目



S40 年代の五力田　現白鳥4丁目付近

開発中の五力田より平尾の塔を望む

現片平公園辺りから見た修廣寺谷戸

かつてお屋敷山と呼ばれた方向。現在はシティハウスなどが建つ。

柿生郷土史料館催物案内　【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

7月　4・11・18・25 日（毎日曜日）　**8月**　7・14・21・28 日（毎土曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時（緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です）

第19回 特別企画展

写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生地区村々の変遷の様子をお楽しみください。期間については蔓延防止等重点措置が延長された場合、宣言解除まで再延期します。

期間　6 月 26 日（土）～ 10 月 30 日（土）　会場　柿生郷土史料館特別展示室